

「神の民の復活」

エゼキエル書 37章 1 - 14節

I コリントの信徒への手紙 15章 58節

森島 牧人 牧師

さて、先回読みました聖書のみ言葉を確認しておきましょう。

今日も世界中の教会で主日礼拝が行われています。そして、そのどこでも「イエス・キリストは世界の主である」という告白が鳴り響いています。この「主日礼拝」が意味するもの、それは主の復活された日である日曜日を基点とし、自分たちの信仰の中心が「主がよみがえられたことを信ずる復活信仰である」ことをその都度確認し、さらに福音が「罪と死の支配の中にある現実の世界と人類を救うために、神が我々の歴史の中に垂直的に介入されて来たものである」ことを、共に承認して福音の真実に固く立つということです。

また復活信仰とは、この世界を救いへと導く真の希望である福音を受けた我々が、それを喜ぶだけではなく、我々自身が変わえられた形として、新しい命に生きて行くことができるというものです。そして、神の人間への愛ゆえに自らを低くされたキリストの御手が、その御言葉、「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。」(ヨハネ 14:18)の通り、どんなところへも届く、届いている、それが神のみ旨であり真理であることを知らされているということです。結論として心に留めるべきことは、主イエスがよみがえられたことを基とする復活信仰は、我々も主と同じようによみがえるということであり、我々が死から新しい命に入れられる約束の中にいる者であることを宣言しているのです。

さて、今日の御言葉・エゼキエル書に入りたいと思いますが、これは今話して来ました復活信仰を旧約から再度見ようとするものです。しかし、そこに見えるのは栄光を失った神の民の姿です。当時、神の都エルサレムは蹂躪され、捕囚としてバビロンに連行されたイスラエルの民は滅亡状態にありました。異郷の力ある者の下で信仰は揺さぶられ、望みは尽き、疲れ果てた神の民・イスラエルの姿でした。

そんな時、神に召し出されたのが預言者エゼキエルでした。彼は死んだ骨のような同胞に向かい、神から与えられた言葉を、声を嗄らして語ったのです。それは、「枯れた骨よ、<主の言葉を聞け>。これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。・・・」(エルサレム 37:4-5) というものでした。そして聖書はさらに続いて、「わたしは命じられたように預言した。すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となった。」(同 37:10) と驚くべきことを記しています。

今ここに集まっている私たちキリスト者の中には、苦しみや絶望のゆえに枯れた骨のようにになっている方がおられるかも知れません。もしそうであるなら、まさにそんな方のために<主はよみがえられた>のです。昔、百メートル先に山小屋があることが分からず、雪を掘った穴で何日か過ごして力尽きた遭難者の記事があります。人生にも長いトンネルに入って脱けられないと思う状況があります。しかし、そのような中で我々が復活信仰を持って耐え忍んで行く時、すぐ近くに山小屋があり、こちらに向かって来てくださる主がおられるのです。聖書は、<それを知らずに力尽きてしまっているのか>と問うているのです。隠れたキリストの支配、**キリストの愛がいつも我々と共にある**という福音の真実にしっかりと立ち、忍耐を持って生きて行くかどうか、今日問われているのです。そして我々が問われているのはもう一つ、己(おのれ)を虚(むな)しゅうして僕となり、人となって死に至るまで神に従順であった主イエスに従い、救われたことを喜ぶと同時に、再度新しい命の中に主イエスと共に生きることが出来るかどうか、問われています。教会とキリスト者は、イエス・キリストの出来事である十字架の死・イースター・ペンテコステ、つまり主日の礼拝から新しい自分を生き始めるのです。

我々キリスト者は全世界の救いのために神に遣わされています。イースター、つまりこの主日からその第一歩を踏み出すのです。使徒パウロは「わたしの愛する兄弟たち、・・・動かされないようにしっかりと立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。」(I コリント 15:58) と言っています。復活の主を信じ、主に在るなら如何なる苦勞も虚しくなることはないということを深く信じて心に留め、果敢に立ち上がってこの主日からの新しい一週間を歩んで行きたいと思います。

(説教要約 羽入田悦子)